

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	E型肝炎	IDWR. 27:35(2025)3-3	2025年9月3日集計分。4類感染症:E型肝炎15例。感染地域(感染源):埼玉県3例(焼き肉1例、不明2例)、北海道2例(牛ホルモン1例、焼き肉/ホルモン1例)、東京都2例(牛レバー1例、不明1例)、神奈川県1例(豚肉)、岐阜県1例(不明)、三重県1例(不明)、国内(都道府県不明)3例(豚レバー1例、豚肉1例、不明1例)
2	E型肝炎	Virologie. 29(2025)357-371	本研究の目的は、アフリカにおけるE型肝炎ウイルス(HEV)の疫学状況を整理し、ヒトと動物間の感染動態を明らかにすることである。HEVは8つの遺伝子型を有し、うちHEV-3およびHEV-4は主に豚に分布し、ヒトへの感染が報告されている。アフリカでは従来、水系感染が主要経路であったが、近年、豚由来のHEV-3を原因とする人獣共通感染が確認され、豚肉の摂取や豚糞との接触がリスク要因とされる。特に豚飼育者や食肉処理従事者で高い抗体陽性率が示され、ウイルス遺伝子も検出されている。さらに、妊婦では感染時に急性肝不全を起こし、母体および胎児死亡率が高いことが問題である。分子疫学の進展により、アフリカでのHEV流行に他の要因が関与している可能性が示唆されている。無症候性感染や再感染の存在は、流行の理解を複雑にしている。アフリカにおけるHEV疫学研究は、ウイルスの理解と予防・制御戦略の策定に不可欠である。
3	E型肝炎	Zoonoses Public Health. 72(2025)442-452	本研究の目的は、ベルギー・フランドル地方において、豚または豚肉に職業的に曝露される労働者が、非曝露者と比較して、E型肝炎ウイルス(HEV)に対するIgG抗体の血清陽性率が高いかどうかを検証することである。本研究では、豚農家、獣医師、屠殺場作業員など92名の曝露群と、217名の非曝露群を対象に、問診票と血清検査を実施した。その結果、曝露群のHEV IgG陽性率は32.6%であり、非曝露群の9.2%と比較して有意に高かった。多変量ロジスティック回帰分析により、年齢、性別、食習慣を調整した後も、曝露群のHEV陽性率は高い傾向を示した。しかし、さらに農場居住の有無を調整因子として追加した第二のモデルでは、曝露群に属することのオッズ比は有意ではなくなった。この結果は、曝露群の39.1%が農場に居住していることに対し、対照群は0.9%であったことから、農場での居住および年齢が、HEV血清陽性と強く有意に関連する主要なリスク要因であり、農場居住が職業上の曝露とHEV血清陽性の関連性に重要な役割を果たしている可能性を示唆している。HEVは豚を主要な宿主とする人獣共通感染であり、豚肉の摂取や豚との接触を通じてヒトに感染する可能性がある。したがって、豚関連産業に従事する労働者に対しては、衛生管理の徹底やリスクに関する教育など、職業的健康対策の強化が求められる。
4	インフルエンザ	Outbreak News Today. https://outbreaknewstoday.substack.com/p/vermont-reports-novel-influenza-a?utm_source=publication-search	Vermont州保健局は、18歳以上の個人におけるインフルエンザA(H1N2)vウイルス感染1例を報告した。当該患者は、2025年10月4日の週に症状を発症し医療機関を受診、入院したが同日中に退院し、現在は回復している。州公衆衛生当局による調査では、当該患者がブタやその他の動物に接触したか、また患者の濃厚接触者に症状が認められたかは確認できなかった。本症例に関連するヒトからヒトへの感染は、確認されていない。これは今年米国で報告された変異型インフルエンザウイルスA(H1N2)vによるヒト感染例としては2例目である。2019年以降、A(H1N2)vの症例は18例報告されている。通常は、ブタ(ヒトではなく)の間で循環するインフルエンザウイルスがヒトから検出された場合、それは「変異型」インフルエンザウイルスと呼ばれる。変異型インフルエンザウイルスによるヒト感染のほとんどは、ブタへの曝露後に発生するが、ヒトからヒトへの感染も起こり得る。多くの場合、変異型インフルエンザウイルスは、ヒトからヒトへ容易かつ持続的に伝播する能力を示していないことに留意することが重要である。新型インフルエンザAウイルスによるヒト感染の早期発見と調査は、感染リスクを把握し適切な公衆衛生対策を講じるために極めて重要である。
5	インフルエンザ	Open Vet J. 15(2025)1866-1879	本レビュー論文の目的は、豚インフルエンザに関する包括的な文献情報を提供することである。豚インフルエンザは、豚インフルエンザウイルス(SIV)によって引き起こされる呼吸器疾患である。豚には主にH1N1、H1N2、H3N2などのA型インフルエンザウイルス(AIV)が存在し、H1N1株はヒトからも分離されている。2009年のH1N1パンデミック株のようなSIVは、ブタからヒトに容易に感染するため、公衆衛生上の重大な懸念を引き起こす。感染は、鼻汁を介した直接・間接接触や、咳やくしゃみによる飛沫・エアロゾルで広がる。症状はヒトの季節性インフルエンザに類似し、発熱、悪寒、頭痛、咳、倦怠感などがみられる。豚では、咳、くしゃみ、鼻汁、発熱などが急速に現れる。経済的影響も大きく、2009年のH1N1パンデミックは世界のGDPに影響を与え、また全世界で推定284,400人の死者を出した。治療は、豚では対症療法と二次感染予防のための抗生物質が中心で、ヒトも対症療法が基本とし、必要に応じて抗生物質や抗ウイルス薬が用いられる。予防策としては、ワクチン接種、適切なバイオセーフティ対策が重要となる。豚はヒトと鳥のインフルエンザウイルスにとって特別な宿主であり、「混合容器」としてヒトに適応した株を生み出す可能性がある。
6	インフルエンザ	Schweiz Arch Tierheilkd. 167(2025)600-616	本研究の目的は、スイスにおける豚とヒトのインフルエンザAウイルス(AIV)の監視を通じて、遺伝的多様性と種間感染の実態を明らかにすることである。2010年から2022年にかけて、インフルエンザ様症状を示す豚と接触したヒトから検体を採取し、リアルタイムRT-PCRおよび遺伝子解析を実施した。結果、674農場訪問中375件でIAV陽性が確認され、亜型はH1N1のみであった。大部分はユーラシア鳥類由来系統(HAクレード1C)であり、2015年以降1C.2.1から1C.2.2へのシフトが認められた。さらに、ヒト由来A(H1N1)pdm09が豚で7例検出され、逆ズーノーシスの証拠となった。さらに、豚と接触したヒト150名中11名がインフルエンザ陽性で、そのうち5名は豚由来IAVであった。獣医師や一般市民の認識向上と欧州における情報補完のため、本監視データの公開が必要であると考えられる。

ID	感染症(PT)	出典	概要
7	ウシ結核	Zoonoses and Public Health. 72(2025)369–378	【背景】1999年から2021年の間に、イングランドではMycobacterium bovis (M. bovis) によるヒトの培養確定例（人獣共通結核、結核）が505例診断された。本研究では、イングランドにおいて結核に感染した牛に曝露した人々における M. bovis 感染の有病率を推定するとともに、この集団における潜在性結核感染 (Latent TB Infection: LTBI) に関連するリスク因子を同定することを目的とした。 【方法】英国農業コミュニティのメンバーと共同で、ウシ結核 (bovine TB) の高リスク地域であるイングランド南西部において後ろ向きコホート研究を実施した。質問票を用いて、参加者の基本属性、行動、および農業慣行に関する情報を収集した。さらに、過去の牛群検査データと連結することで、参加者を結核曝露リスクの低・中・高の3群に分類した。潜在性結核感染の有無は、QuantiFERON を用いたインターフェロンγ遊離試験 (IGRA) の陽性の有無により判定し、その結果を質問票データと連結して解析した。 【結果】アグリカルチャーショーおよび単独開催イベントにおいて90名をリクルートした。参加者の内訳は、農家／農業従事者が76名 (90名中)、獣医療専門職が10名 (90名中) であった。年齢中央値は45.5歳 (四分位範囲 [IQR]: 19–77歳) で、63%が男性、67%がBCG接種歴ありと回答した。M. bovis への曝露は、感染牛との直接接接触および生乳の摂取によるものであった。高リスク群の参加者1名がIGRA陽性であり、それ以外の参加者はすべてIGRA陰性であった。IGRA陽性率の推定値は、全参加者で1.1% (95%信頼区間 [CI]: 0.058–7.0%)、高曝露群では4.0% (95% CI: 0.21–22%) であった。 【結論】イングランドにおいて、結核に感染した牛と接触する人々では、高度かつ長期間の曝露があったにもかかわらず、LTBIは限定的であった。本研究により、将来的な介入や関与の優先対象とすべき高リスクの農家集団が特定された。
8	コリネバクテリウム感染	Emerg Infect Dis. 31(2025)1450–1454	本研究の目的は、新たな人獣共通感染症候補であるCorynebacterium silvaticumによるヒト感染を報告することである。本菌はジフテリア毒素遺伝子を持するC. diphtheriae種複合体に属し、野生イノシシや豚から分離されてきた。今回、ドイツで腋窩リンパ節炎と膿瘍を呈した2例を確認し、1例は野生イノシシの解体との関連が推定された。両株は非毒素産生型であり、全ゲノム解析により動物由来株と同一クレードに分類された。本菌は豚や野生動物を介したヒト感染の可能性があり、今後の監視と予防策が必要である。
9	コンゴ・クリミア出血熱	PLoS Negl Trop Dis. 19(2025)e0013648	本研究の目的は、コンゴ民主共和国におけるクリミア・コンゴ出血熱ウイルス (CCHFV) の家畜および農業従事者への曝露状況を明らかにすることである。2023年6月から2024年7月にかけて9州で牛1,118頭、豚1,020頭、農業従事者180名の血清を調査した結果、牛では57.0%、豚では13.4%、農業従事者では12.8%が抗CCHFV抗体陽性であった。特に南東部のタンガニーカ州およびルアラバ州では牛の陽性率が90%を超え、豚ではカサイ州で42.1%と高率であった。農業従事者の陽性率はマニエマ州とキンシャサ州で25%前後と高く、個人防護具の使用は限定的であった。
10	テニア症	BMC Veterinary Research. 21(2025)588	本研究の目的は、ウガンダにおけるブタとヒトの間で循環するTaenia solium感染の影響と、その制御を阻害する要因を明らかにすることである。研究はコミュニティベースで実施され、システム効果モデリングを用いて、感染による結果と推奨される予防策 (トイレ使用、豚の囲い込み、豚肉の十分な加熱) の採用を妨げる障壁を分析した。結果として、神経囊虫症は発作、認知障害、死亡など重大な影響を及ぼし、豚の囊虫症は成長不良や市場価値の低下を引き起こすことが示された。障壁としては、知識不足、経済的制約、社会文化的要因が主要であり、これらが感染の持続に寄与している。
11	テニア症	Outbreak News Today. https://outbreaknewstoday.substack.com/p/pork-tapeworm-taenia-solium-hyperendemic?utm_source=publication-search	国際農業研究協議グループ (OGIAR) によると、ウガンダ北部で実施された最近の研究において、同地域がブタ条虫 (Taenia solium) の超流行地域であることを研究者らが確認した。本研究では、サナダムシによるブタの感染症であるブタ条虫症の有病率が17.4%であることが判明した。さらに、放し飼いのブタ、井戸水を飲むブタ、トイレのない世帯のブタは、ブタ条虫への感染リスクが高いことが明らかになった。PLOS Neglected Tropical Diseases誌 (2025年8月号) に掲載されたこの横断研究は、ウガンダ北部4地区で実施され、地域内の高流行地域を特定した地理空間リスクマップの検証と、ブタ条虫症の有病率及び危険因子の解明を目的とした。本研究の共著者は、国際家畜研究所 (ILRI)、Makerere大学、Edinburgh大学、Prince Edward島大学、及びAgago, Kitgum, Lamwo及びPader地区の地方政府獣医事務所に所属している。
12	テニア症	Tropical Medicine & International Health. 30(2025)848–852	本研究の目的は、ラオス北部における寄生虫Taenia solium (有鉤条虫) によるヒト感染症「条虫症 (taeniasis)」のリスク因子を明らかにすることである。本研究は、糞便PCR検査によりT. solium陽性と判定された18症例と、陰性の36対照を対象としたマッチドケースコントロール研究である。調査の結果、生または加熱不十分な豚肉の摂取が有意なリスク因子であり、特に野生豚由来の生肉や、商業・地元豚由来の加熱不十分な焼き豚が感染源となる可能性が高いことが示された。また、豚肉の発酵食品も感染リスクが高い傾向を示した。本研究は、豚が中間宿主、ヒトが終宿主となるT. soliumのライフサイクルに基づき、ヒトが豚肉中の囊虫を摂取することで感染し、さらにヒトの糞便を介して環境中に卵が拡散されることで、他のヒトや豚に感染が広がることを示している。
13	トキソプラズマ症	AASV. https://www.aasv.org/2025/12/abstract-systemic-toxoplasmosis-in-weaned-pigs-in-pennsylvania-usa-with-a-brief-review-of-the-literature/	トキソプラズマgondiiは、獣医学において重要なアピコンプレクサ門寄生虫であり、ブタにおける感染率は年齢、地理的分布、生産プログラムによって変動する。多系統疾患が懸念される小規模家庭農場の生後6週齢ブタの検体が、Iowa州立大学獣医診断研究所に提出された。肉眼的所見には、偽膜形成を伴う重度の壊死性腸炎及び浮腫性で浮腫を伴う非虚脱性肺が認められた。組織学的所見は、重度の壊死性腸炎及び多発性肺・肝壊死であり、T. gondiiと一致する多数の病巣内原虫囊胞が認められた。免疫組織化学、逆転写リアルタイムPCR (RT-rtPCR)、血清学的検査ではT. gondii陽性であった。RT-rtPCRにより、同時感染が疑われたインフルエンザAウイルス、ブタ繁殖・呼吸障害症候群ウイルス、ブタサーコウイルス2型、アフリカブタコレラウイルス、ブタ熱ウイルスは陰性と判定された。T. gondiiの世界的な分布と人獣共通感染症としての潜在性を考慮すると、ブタにおける感染の可能性を念頭に置くべきである。

ID	感染症(PT)	出典	概要
14	ブルセラ症	PIG PROGRESS. https://www.pigprogress.net/health-nutrition/health/back-after-26-years-brucella-suis-emerges-in-danish-pigs/	国際獣疫事務局(WOAH)のウェブサイトによると、2025年8月1日、Herning近郊の放牧ブタ群(総頭数3,850頭)で初めて感染の疑いが確認された。流産サンプルは、デンマークの基準検査機関Ansesに送付され、8月22日にブルセラ・スイス(Brucella suis)バイオペ(次亜種)2の陽性が確認された。9月上旬には、接触農場5件でも陽性が判明。全農場はJutland半島中西部に位置し、東西65kmの範囲に分布している。感染による死亡例は確認されていない。このニュースの影響について、デンマーク獣医食品庁が情報を共有した。同行は、EU域内の他国へ食用ブタを輸出するデンマークの全ブタ群に影響が及ぶと発表した。これは繁殖用ブタと肥育用ブタの両方に当てはまる。同行は、ブタ輸出許可の基礎となる新たな申告書の作成を開始した。当面の間、要件に沿った証明書を発行可能とする暫定措置が実施されている。ブルセラ・スイス(Brucella suis)は、人獣共通感染症の可能性を有する。この細菌による感染は、野ウサギなどの野生動物を介して発生する可能性がある。屋外飼育群では、直接感染するほか、野生動物由来の感染物質を含む飼料を経由して感染する場合もある。本病の症状としては、雌ブタにおける流産や、雄ブタにおける睾丸の著しい腫脹が挙げられる。
15	レンサ球菌感染	AASV. https://www.aasv.org/2025/07/abstract-occupational-exposure-and-human-carriage-of-streptococcus-equi-subsp-zooepidemicus-resulting-in-multiple-livestock-outbreaks/	3年間に、2つの異なる素朴な独立した養豚場で、S. zooepidemicusの発生があった。農場Aでは、3回発生し、3回殺処分が行われた。B農場では、1回のみ発生した。分離株は、全ゲノム配列決定により遺伝学的にプロファイリングされた。株特異的リアルタイムPCR法により、保菌の可能性と環境負荷について検査された。環境サンプル及びヒト以外のキャリア(保菌動物)は発生を通じて陰性であった。すべての発生で、ブタから回収された分離株は、サイトAとサイトBで平均99.9%以上のヌクレオチド同一性を示した。系統学的解析から、すべての分離株は、近縁であることが示唆された。B農場で最初のブタの事例が発生する直前にA農場とB農場を行き来していた患者は、すべてのブタを除去した後、各発生前にA農場にいた。また、患者はマスクにS. zooepidemicusを排出しており、鼻咽頭スワブからのリアルタイムPCRで陽性であった。S. zooepidemicusのヒト保菌者は、A農場での最初のブタの発生時に感染した可能性が高い。それらは病原体を排出し、A農場で複数の発生を引き起こし、病原体がB農場に持ち込まれた。これはS. zooepidemicusによる人獣共通感染症の最初の記録例であり、ヒトが感染し、病原体を動物に広める可能性があることを示している。
16	レンサ球菌感染	Emerg Infect Dis. 31(2025)1277-1286	本研究の目的は、南米におけるStreptococcus suisヒト感染の実態を明らかにすることである。S. suisは豚に由来する人獣共通感染症で、髄膜炎や敗血症を引き起こす。本調査では、アルゼンチン、ブラジル、チリ、仏領ギアナ、ウルグアイで報告された症例を集約し、さらにアルゼンチンで新たに8例を確認した。これにより、1995～2024年の南米におけるヒト感染は計47例となり、85%が髄膜炎で、致死率は4%であった。感染は豚や豚肉との接触、特に農場や屠殺作業、または加熱不十分な肉の摂取と関連していた。アルゼンチンでは豚産業規模に比して症例数が多く、監視体制の重要性が示唆された。
17	レンサ球菌感染	One Health. 20(2025)101063	背景: Streptococcus equi 亜種 zooepidemicus (ストレプトコッカス・ゾーエペディミクス/ ランスフィールド C 群連鎖球菌, β溶血性レンサ球菌)は敗血症の原因となり、職業上の危険因子でもある。これまで人へのみ感染すると考えられており、人がこの病原体の長期保菌者になるという証拠は存在していなかった。 方法: 3年間にわたり、2つの異なる、かつ初感染の養豚場で S. zooepidemicus のアウトブレイクが発生した。A農場では3回の豚の全頭淘汰と3回のアウトブレイクがあり、B農場では1回のアウトブレイクのみだった。分離株は全ゲノムシーケンスにより遺伝的プロファイリングを行った。潜在的な保菌者および環境中の病原体負荷は、菌株特異的リアルタイムPCRによって検査した。 結果: アウトブレイク期間中、環境サンプルおよび非ヒト保菌者はすべて陰性だった。A農場およびB農場のすべてのアウトブレイクから回収された豚由来の分離株は、平均塩基配列一致率が99.9%以上であった。系統解析により、すべての分離株が関連していることが示唆された。患者1は、B農場で最初の豚症例が発生する直前にA農場とB農場を行き来しており、A農場で豚がすべて除去された後、各アウトブレイクの前に現場にいた。また、マスクから S. zooepidemicus を排出しており、鼻咽頭スワブによるリアルタイムPCRでも陽性であった。 解釈: 患者1は、A農場で最初の豚のアウトブレイク時に S. zooepidemicus に定着した可能性が高い。彼は病原体を排出し、A農場で複数回のアウトブレイクを引き起こし、B農場への病原体の導入につながった。これは S. zooepidemicus による両方向性人獣共通感染症(amphixenosis)の初の記録例であり、人がこの病原体に定着し、動物に伝播する可能性があることを示している。
18	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20250915.8727322	2025年9月14日、Hanoi市保健局は、2025年8月23日に発症しHa Dong病院に入院した患者を登録した。同患者は、ブタ連鎖球菌(Streptococcus suis)陽性と判定された。患者は、2025年8月にブタの内臓と発酵春巻きを飲酒しながら食べていたと述べた。これは2025年以降のHanoiにおける9例目のブタ連鎖球菌感染であり、うち1例が死亡している。症例数は、2024年と比較して増加している。ブタ連鎖球菌は、人獣共通感染症であり、ヒトからヒトへの感染の症例はない。ほとんどの症例は、生血のプディングやその他の加熱不十分な食品の屠殺・摂取に関連している。一部の症例では、血のソーセージを食べず、ブタの屠殺も行っていないにもかかわらず、生又は病変のある豚肉を摂取したことで発症したり、加工中に皮膚損傷や引っかき傷から感染したりしている。重症化すると、敗血症、敗血症性ショック、循環器系崩壊、低血圧、重度の凝固障害、出血性壊死、塞栓症、多臓器不全、昏睡、そして死に至る可能性がある。ヒトにおけるブタ連鎖球菌感染症を予防するワクチンは、現時点で存在しない。保健当局は、完全に火を通したブタ肉のみを食べ、生血のソーセージやその他の加熱不十分な料理を避けるよう推奨している。ブタ肉を調理する際は、特に皮膚に傷がある場合、感染リスクを避ける為、保護手袋を使用すべきである。高熱、頭痛、吐き気などの疑わしい症状が現れた場合は、病院で検査を受け、適切な治療を速やかに受ける必要がある。

ID	感染症(PT)	出典	概要
19	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20251111.8728632	男性が、生血のブディングを摂取後、重篤な細菌感染症と多臓器不全を発症した。この感染症は、ブタ連鎖球菌 (<i>Streptococcus suis</i>) による人獣共通感染症であり、加熱不十分なブタ肉製品の摂取や感染ブタとの接触が原因となることが多い。本記事では、感染予防の為に豚肉を十分に加熱すること、あらゆる動物の生血ブディングを避けること、生のブタ肉を扱う際の保護具使用の重要性を強調している。血液ブディングを食べた後、32歳の男性が、呼吸困難に陥り、ブタ連鎖球菌 (<i>Streptococcus suis</i>) 感染による多臓器不全で入院した。2025年11月9日、Lang Son総合病院の代表者は、患者の血圧が急激に低下し、顔面・胸部・腕全体に紫色の壊死性発疹が多数現れ、頻繁な下痢を伴っていたと述べた。家族の話では、発症約1週間前に豚の血液ブディングを食べ、数日後から倦怠感・腹痛・極度の疲労・呼吸困難・頭痛・吐き気が現れ、出血性発疹が発生して急速に重篤化したという。医師は、ブタ連鎖球菌感染症による敗血症性ショックと多臓器不全と診断した。集中治療後、男性は危険な状態を脱したが、予後は依然として慎重である。ブタ連鎖球菌 (<i>Streptococcus suis</i>) は、人獣共通感染症であり、ヒトからヒトへの感染の証拠はない。患者の多くは、屠殺作業又は生の血液ブディングやその他の加熱不十分な食品の摂取に関連している。生の血液ブディングやブタの屠殺をしていないにもかかわらず発症する症例もある。原因は、感染した生のブタ肉を食べること又は加工処理中に皮膚損傷や引っかき傷を通じて感染したブタと接触することである。本疾患は、急速に敗血症性ショック、循環器系崩壊、低血圧、重篤な凝固障害、出血性壊死、塞栓症、多臓器不全、昏睡、死に至る可能性がある。これを防ぐには、ブタ肉を十分に加熱調理すること、病気のブタや原因不明で死亡したブタを屠殺しないこと、生食(特にブタの血液ブディング)を摂取しないことが重要である。生ブタ肉の処理時には保護具(手袋)を使用すること。
20	丹毒	日本臨床微生物学会 雑誌. 35(2024)366	本研究の目的は、豚丹毒菌 (<i>Erysipelothrix rhusiopathiae</i>) によるヒト感染の稀少例を報告することである。患者は60代女性で基礎疾患を有し、熱中症・誤嚥性肺炎として治療中に血液培養で本菌を検出した。菌はグラム陽性桿菌で、培養により α 溶血を示し、VITEK MSで同定、硫化水素産生とVCM耐性を確認し、血清型6型と判明した。豚丹毒菌感染は①限局性皮膚型、②全身性皮膚型、③敗血症の3型が知られ、血清型1・2型が多い中、本例は6型による敗血症で極めて稀少である。従来は診断困難であったが、質量分析やOCRの普及により今後報告増加が予想される。
21	旋毛虫症	Outbreak News Today. https://outbreaknewstoday.substack.com/p/argentina-trichinosis-outbreak-reported-644?utm_source=publication-search	Buenos Aires州のAzul町で、旋毛虫症(トリヒネラ症)の発生が報告された。現在までに、Dr. Angel Pintos市立病院の救急室で28人が治療を受けている。そのうち25人は成人(そのうち2人は入院を要した)で、3人は子供である。患者は、家族や友人との食事で手作りの加工肉(チョリソ、ベーコン、生ハム)を摂取したと報告している。これらの加工肉に使用されたブタ肉は、旋毛虫 (<i>Trichinella spiralis</i>) の検査を受けていなかった。この状況を受け、Azul町は地域社会に対し、出所不明の自家製加工肉や、検査を受けていないブタや野生のイノシシから作られた加工肉の摂取を控えるよう改めて要請した。もし摂取した場合は、直ちにDr. Angel Pintos市立病院の救急室に連絡し、治療を受けること。旋毛虫症は、主に回虫 (<i>Trichinella spiralis</i>) によって引き起こされる寄生虫疾患である。被嚢化した幼虫を含む生肉や加熱不十分な肉を摂取すると、胃酸が幼虫を解放し、腸内で成虫に成長する。約1週間後、雌成虫が幼虫を放出し始め、幼虫は血液中に侵入し、骨格筋に到達して包嚢を形成する。成虫が腸内で活動すると、急性食中毒に似た胃腸症状が現れることがある。突然の発熱、筋肉痛、顔の一部の腫れを伴う痛みなどが、初期の典型的な兆候である。その後、網膜出血やその他の眼症状が現れることがある。重度の感染では、心臓、呼吸器、神経系の問題が発生し、心臓不全で死亡するのが最も一般的である。摂取する幼虫の量が多いほど、病気の重症度も高まる。予防措置としては、新鮮なブタ肉、ブタ肉製品、野生動物の肉は、すべての肉を160° F(72° C)に達するまで加熱すること。肉はピンクから灰色に変化する。ブタ肉を-13° F(-25° C)で少なくとも10日間冷凍すると、嚢胞を死滅させることができる。ただし、セイウチやクマの肉に存在する旋毛虫の株は寒さに耐性がある為、上記のように加熱する必要がある。燻製、塩漬け、乾燥処理は効果的ではない。
22	旋毛虫症	ProMED-mail 20250921.8727442	Cordoba州保健省は、州内複数地域で発生した旋毛虫症の集団感染を受け、健康警報を発令した。調査によると、この集団感染は自家製ソーセージを含む生又は加熱不十分なブタ肉製品の摂取に関連している。症状には発熱、筋肉痛、胃腸障害が含まれる。当局は、感染拡大の抑制に努めており、公的に表示された肉製品のみを消費し、衛生管理を受けていない製品を避けるよう市民に呼びかけている。Cordoba州保健省は、州内の複数地域で発生した旋毛虫症の発生を確認し、健康警報を発令した。これまでに、Serrano, Rio Cuarto, Alpa Corral, Wenceslao Escalante, Colonia Tiroleza 及び Cordoba市に分布して計65例の症例が報告されている。公式発表によると、感染者数は、Serrano郡28例、Rio Cuarto郡14例、州都Cordoba市11例、Alpa Corral郡5例、Wenceslao Escalante郡4例、Colonia Tiroleza郡3例である。感染者のうち10名が一時入院し、現在も1名が継続入院中。残りは、外来治療中で経過良好である。疫学調査により、一部の発生は家庭での屠殺で入手した自家製ソーセージ(サラミやチョリソなど)の摂取に関連している可能性が判明した。その他の感染例は、商業流通経路で購入した製品に関連している。この状況を受け、当局は旋毛虫症が寄生虫 (<i>Trichinella spiralis</i>) に汚染された生又は加熱不十分なブタ肉の摂取によって伝染する疾患であることを改めて注意喚起した。主な症状には発熱、激しい筋肉痛、頭痛、眼周囲の腫脹、下痢、嘔吐が含まれる。対策はCordoba州保健省人獣共通感染症局が、国立農業衛生局(Senasa)、バイオアグロ産業省検査局、食品産業管理局、居呼び影響を受けた自治体と連携して実施している。保健省は、疾病予防の為には公的ラベル付きの動物性製品のみを消費すべきだと強調した。無許可の場所での肉・肉製品の購入は避け、衛生管理されていない自家製ソーセージを摂取しないこと。また、塩漬けや燻製処理では寄生虫は死滅しないことを認識すること。

ID	感染症(PT)	出典	概要
23	旋毛虫症	ProMED-mail 20251030.8728367	加熱不足のチョリソを摂取した後に旋毛虫症の発生が起こった。感染者は、消化器症状や浮腫などの症状を発症した。本疾患は生肉又は加熱不足の肉に存在する寄生性線虫によって引き起こされる。感染は、薬剤で治療可能であり、予防できる。加熱不十分のチョリソの摂取により、General Cabrera町で計13例、General Dehezaで1例の旋毛虫症が報告された。最も重篤な症例は、20歳の男性で、嘔吐やその他の消化器症状の為入院を要したが、現在は安定している。Cabrera病院院長のPablo Pognante医師が、Puntal紙に確認した。血清学的確定診断は未確定だが、既に全例を陽性症例として対応している。Cordoba州環境警察は、複数の場所を家宅捜索し、Cabrera市のBoulevard Espana 50番地にある家屋を含むさまざまな場所で家宅捜索を実施し、商品を押収した。体調不良の状態でこれらの製品を摂取した人々は、2025年10月15日から20日にかけて症状を示し始めた。疫学的関連性は、Cabreraでの出来事で確認され、発症したDehezaの人も同席していた。専門家は、旋毛虫症の臨床症状がデング熱と類似していると指摘した。胃腸炎、発熱状態、そして今回の症例では、両眼の浮腫も認められた。トリヒナ症とも呼ばれるこの疾患は、線虫感染症の一種である。寄生性線虫(トリキネラ属)は、宿主の体内で生活・繁殖する。クマ、ビューマ、セイウチ、キツネ、イノシシ、飼育ブタなどの動物が感染源となる。感染は生肉又は加熱不十分な肉に含まれる未成熟体(幼虫)を摂取することで行く。ヒトが生又は加熱不十分な旋毛虫の幼虫を含む肉を摂取すると、幼虫は小腸内で成熟し成虫となる。この過程には数週間かかる場合がある。[最長2週間だが通常は数日 - Mod.LL] 成虫は幼虫を産み、これらは血流を通じて体内の様々な部位へ移動し、最終的に筋肉組織に定着する。旋毛虫症は、主に世界中の農村地域で広く蔓延している。治療は薬物で行えるが、必ずしも必要とは限らない。また、予防は非常に容易である。
24	旋毛虫症	ProMED-mail 20251208.8729296	Neuquén州の保健当局は、旋毛虫症の症例を確認し、複数の精肉店で汚染されたソーセージを発見した。調査により、生産記録やトレーサビリティ記録の欠如など事業者のプロセス上の不備が明らかになり、規制外の肉の使用が示唆された。当局は、疾病予防の為に消費者が表示された製品を要求し、ブタ肉を適切に加熱調理することの重要性を強調した。Neuquén州保健省は、2025年12月3日、市内において旋毛虫症の症例3件を確認したことを発表した。これを受け、2軒の精肉店で汚染ソーセージが発見された。保健当局は、家族集会で感染した患者の消費経路を再構築した結果、症例を確認した後、疫学調査を開始した。保健当局からRio Negroが入手した情報によると、旋毛虫症の確定症例は3例、検査中の症例は3例。重篤な症状を示した患者はいない。合計で約20名が、感染リスクに晒された。調査過程で、採取したソーセージサンプルから本病の原因寄生虫である旋毛虫(Trichinella spiralis)の存在が検出された。このため自治体は「原材料の調達源に対する管理不足」を理由に、予防措置として当該店舗の営業停止と商品の没収を命じた。保健当局は「今回の事例は路上販売ではなく、『認可を受けた事業体』によるもので、その製造工程に重大な欠陥があった」と警告。「検査では、生産記録やトレーサビリティ記録が欠如していることが判明した」と強調した。旋毛虫症(旋毛虫病)は、ブタやイノシシなどの野生動物の筋肉に寄生する微小な線虫状寄生虫旋毛虫によって引き起こされる疾患である。生きた寄生虫幼虫を含む生の肉や加熱不十分な肉、あるいは肉製品を摂取することで感染する可能性がある。塩漬けや燻製処理では寄生虫を死滅させられない為、確実な予防法とはならない。アルゼンチンでは、ヒトへの主な感染源は家畜ブタである。塩漬け肉、ソーセージ又は生のブタ肉購入時の推奨事項としては、表示ラベルの要求: すべての加工品(チョリソ、サラミ、塩漬けブタ肩肉)には、原産地と食品安全検査合格を証明するラベルが必須である。「手作り」でラベルがない製品は検査済みとは保証されない ・原産地が重要: ブタ肉は安全な食肉処理場と認可された加工施設から調達されなければならない。販売目的の家庭内屠殺は、通常必要な獣医検査が欠如しているため禁止されている。完全な加熱調理が必須: 旋毛虫症の寄生虫は加熱で死滅する。生ブタ肉を調理する際は、ピンク色が完全に消えるまで加熱すること。誤解: 塩漬けや燻製だけでは不十分である。レモン・塩・燻製で寄生虫が死滅するという説は誤りである。原材料が事前に検査されていない場合、コールドカットや乾燥ソーセージが最も危険である。
25	旋毛虫症	ProMED-mail 20251218.8729517	アルゼンチンCordoba州保健省は、Laboulayeで発生した旋毛虫症の発生を報告した。発生源を特定する為の調査が進行中であり、初期調査結果では、表示のない路上販売のサラミの摂取が原因の可能性が高いと示唆されている。保健当局は、規制外の業者からのブタ肉製品の摂取を避ける重要性を強調し、汚染食品の起源を追跡し、対策を実施する為、様々な機関と連携している。旋毛虫症の症状が現れた場合は、速やかに医療機関を受診するよう市民に呼びかけている。Cordoba州保健省は、人獣共通感染症局を通じて、12月17日、州南部Laboulaye在住者5名に旋毛虫症が確認されたと発表した。症状が一致する患者を評価した結果、地元の公衆衛生センターで該当する診断が下され、疾患が確認された。保健省関係者によると、5名の患者は、医療処置を受け、公式通知時点では外来通院中で臨床経過は良好だという。旋毛虫症は通常、発熱、筋肉痛、頭痛、全身倦怠感などの症状を示すが、その重症度は症例によって異なる。州保健省は、自治体当局と連携し、感染源をより正確に特定するため疫学調査を開始した。この取り組みの一環として、人獣共通感染症部門の専門家が聞き取り調査とデータ収集を実施し、曝露パターンや検出された症例間の関連性を特定している。保健チームによる初期の疫学調査では、無表示の路上販売サラミの摂取が感染源の可能性が高いと特定された。適切なトレーサビリティや衛生管理なしに製造されるこの種の肉製品は、本疾患の原因寄生虫である旋毛虫(Trichinella spiralis)の伝播リスクが高いことが知られている。旋毛虫症は、寄生虫Trichinella spiralisの幼虫に汚染されたブタ肉又はブタ肉製品を摂取することで感染する人獣共通感染症である。生肉や加熱不十分な肉の摂取と関連付けられることが多いが、適切な食品安全管理を受けていないソーセージや加工肉を通じて感染する可能性がある。Laboulayeでのこの事件は、州内で最近発生した旋毛虫症の発生と関連しており、これらはすべて出所不明の肉製品の消費・販売に起因している。例えば、2024年には、Cordoba州内の複数の地域で複数の症例が報告され、いずれも地元店舗で購入した自家製ソーセージの摂取に關連していた。Trichinella spiralisは家畜ブタとの関連が最も一般的である。他の種及び亜種は、ブタに対する相対的感染力が低く、主に狩猟動物に生息することから重要視される。(T-5 は米国東部のクマやその他の野生動物、T-6 は米国北西部のクマやその他の野生動物、T. nativaはアラスカに生息) T. nativaとTrichinella T-6 は、どちらも凍結耐性がある。Trichinella pseudospiralisは、稀に鳥類から報告され、ブタにも感染することがある。ウマなどの草食動物も感染例があり、おそらくネズミなどの感染哺乳類が馬飼料用のオーツ麦に混入したことが原因と考えられる。

ID	感染症(PT)	出典	概要
26	日本脳炎B型	ProMED-mail 20251005.8727818	Chhattisgarh州Sarguja地区において、ブタの検体検査により日本脳炎(JE)ウイルスの存在が確認された。保健省は警告を発し、関係当局に標準手順の遵守を指示した。このウイルスは、蚊によって媒介され、通常は動物に害を及ぼさないが、人間には危険な場合がある。この疾患は、脳の炎症を引き起こし、人同士の直接感染は、起こらない。予防策は、蚊の駆除と小児へのワクチン接種が中心となる。Chhattisgarh州Sarguja地区において、120頭のブタから採取した61検体が日本脳炎(JE)陽性反応を示した。日本脳炎は、蚊の吸血によって感染が広がる。蚊の吸血を通じて人間にも感染する可能性がある。保健省関係者によると、Sarguja地区のAmbikapur、Lundra、Batauli、Sitapur、Mainpat地域から採取した120頭のブタの検体を、日本脳炎の疑いがあるとして検査に回した。検体は検査の為ICAR(インド農業研究会議)Bengaluruに送付された。報告書では、61件の陽性例を確認し、これを受けChhattisgarh州保健省は警告を発令。緊急事態対応の為の標準作業手順(SOP)の遵守を関係当局に指示した。州獣医局当局者によれば、このウイルスは、通常動物には害を及ぼさないが、人間に感染すると危険となる。JEVは、蚊媒介性フラビウイルスである。鳥類は、維持宿主／保菌宿主として機能し、蚊は脊椎動物宿主間及びヒトへの媒介を行う。ヒトは通常、終宿主となる。ブタは、増幅宿主と見なされる。蚊に刺された後、ブタは、比較的高いウイルス血症を発症し、これにより吸血した蚊が、ウイルスを採取し伝播を拡大させる。ブタにおける臨床症状は軽度又は無症状であることが多い。ただし、妊娠中の雌ブタが感染すると、繁殖上の損失(胎児死亡、死産、胎児の神経学的欠陥、弱った子ブタ)が生じることがある。多くのJEV流行地域では、ブタは伝播サイクルの重要な構成要素であり、ヒトへのリスク評価と介入の為に、ブタの感染状況を監視することが不可欠である。
27	炭疽	ProMED-mail 20250519.8724410	カナダ・サスカチュワン州で、牛の炭疽感染が確認された。原因菌である炭疽菌(Bacillus anthracis)は土壌中で長期間生存し、環境変化により地表に現れ、汚染された牧草を通じて家畜に感染する。感染した動物は突然死することが多く、反芻動物が特に感受性が高い。予防にはワクチン接種が有効で、過去に発生歴のある地域では毎年の接種が推奨されている。感染が疑われる場合は獣医師による診断と検査機関での確認が必要。人への感染リスクは低い。感染動物や死骸との接触による感染の可能性があるため、曝露が疑われる場合は医師への相談が推奨される。
28	炭疽	Saskatchewanホームページ. https://www.saskatchewan.ca/government/news-and-media/2025/may/14/anthrax-confirmed-in-cattle-in-the-rm-of-paynton-no-470#:~:text=470,-Released%20on%20May&text=Saskatchewan%20Agriculture%20is%20reminding%20producers.470.	2025年5月、カナダ・サスカチュワン州の農村で、牛の死因として炭疽が確認された。炭疽は土壌中に長期間生存する細菌によって引き起こされ、特に乾燥した年や地面の掘削などで感染リスクが高まる。感染した家畜は突然死することが多く、予防にはワクチン接種が有効である。感染が疑われる場合は、死骸を動かさず、獣医師に連絡して検査を受ける必要がある。人への感染リスクは低いものの、直接接触による感染の可能性があるので、注意が呼びかけられている。
29	皮膚炭疽	WHO ホームページ. https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2025-DON573	2025年5月1日から4日の間に、タイのMukdahan県(ラオスとの国境付近)において皮膚炭疽の確定症例4例(1例の死亡を含む)が特定された。確定症例の年齢範囲は36歳から58歳で、男性3例と女性1例であった。全症例がウシの屠殺作業に疫学的に関連していた。最初のウシは2025年4月12日に功徳を積む行事中に屠殺され、その肉は村人に配布された。2025年4月28日には2頭目のウシが屠殺された。全症例でこれらの動物の屠殺過程における肉への曝露や接触が感染源だと考えられている。最初の症例は右手に発疹を呈し、それは4月24日までに明確に視認される病変に進行した。患者は病変の黒化、右腋窩リンパ節腫脹、浮動性めまい、痙攣などの臨床症状の悪化により、4月27日に紹介病院へ転院したが、疾患の合併症の結果として同日に死亡した。その他の3例は膿疱性および水疱性病変を呈し入院した。2025年5月28日現在、3例はレボフロキサシンとドキシサイクリンの10日間投与を完了して退院した。炭疽菌は4例全例でRT-PCRにより確認された。計636人が感染リスクありとして2025年5月10日まで監視下に置かれたが、そのうち28人が直接屠殺に関与し、その他の人々は生の牛肉を消費していた。リスクの高い人々に対する曝露後予防としてドキシサイクリンが7日間投与された。5月28日にはウシの屠殺に関連したMukdahan県での5例目の確定症例が発表された。本件は、1994年以来タイで初めて報告された炭疽菌関連の死亡となった。
30	鳥インフルエンザ	Emerg Microbes Infect. 14(2025)2542247	高病原性鳥インフルエンザウイルス(HPAIV)は、公衆衛生上の重大な懸念事項である。2024年3月、米国で初めて乳牛群におけるHPAIV H5N1のアウトブレイクが報告された。それ以降、ウイルスは牛群内で拡大し、一部はヒトにも感染した。最近の研究では、テキサス州の感染乳牛農場で働いていた作業員から分離された**ヒト由来株(HPbTX)**が、乳牛由来株(HPbTX)と比較して、マウスにおける複製速度と病原性が高いことが示された。本研究では、HPbTXがヒト細胞内でポリメラーゼ活性が高いことを確認し、その主因がPB2タンパク質であることを明らかにした。部位特異的変異導入とアミノ酸の入れ替え実験により、HPbTXとHPbTXの間で異なる3つのアミノ酸のうち、PB2のE627K変異がポリメラーゼ活性の増強に最も強く寄与していることが判明した。また、E362G変異も活性に影響を与えたが、E627Kほどではなかった。さらに、M631L変異もポリメラーゼ活性を高めることが確認された。PB2の627番と362番の残基に変異を導入した**機能喪失型組換えウイルス(rHPbTX)**を用いた実験では、病原性と複製能が著しく低下し、HPbTX野生型と同程度になった。これらの結果は、乳牛由来のHPAIV H5N1がヒトへの感染後にアミノ酸変異を獲得し、ヒト細胞内での複製能とマウスにおける病原性を高めていることを示している。

ID	感染症(PT)	出典	概要
31	鳥インフルエンザ	Eur J Clin Microbiol Infect Dis. 44(2025)1817-1833	背景 2024年に米国の乳牛で発生した高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)H5N1のアウトブレイクは、人獣共通インフルエンザウイルスの挙動における重要な変化を示している。これまでH5N1は主に鳥類に感染する病原体であり、哺乳類への感染は限定的だった。しかし、複数の州にわたる乳牛群で確認されたクレード2.3.4.4b型H5N1の出現は、ウイルスが哺乳類に適応しつつあることを示しており、公衆衛生、獣医学、農業にとって重要な懸念材料となっている。 結果 このウイルスは乳腺組織に特異的な感染性(トロビズム)を示し、生乳中に高濃度のウイルスが検出された。ゲノム解析では、哺乳類の受容体への結合性を高め、全身感染を促進する変異が確認された。ウイルスRNAは未殺菌の生乳から検出され、食品安全上のリスクが示唆されたが、標準的な加熱殺菌(パステライズ)処理によりウイルスは不活化されることが確認された。疫学データによると、アウトブレイクは野鳥からのスピルオーバーまたは汚染された物品(fomites)によって始まり、その後、牛群内で効率的に感染が広がったと考えられる。感染した乳牛関連の施設において41件のヒト感染例が確認された。乳量の減少や貿易制限により、経済的損失も大きかった。現時点ではヒトからヒトへの感染は少ないが、人獣共通感染症としてのリスクには迅速な対応が求められる。 結論 このアウトブレイクは、監視体制、バイオセキュリティ、部門間の連携における重大な課題を浮き彫りにした。One Healthアプローチ(人・動物・環境の統合的対策)が不可欠である。推奨される対策には、以下が含まれる。・監視体制の強化・厳格なバイオセキュリティ対策・職業的安全プロトコルの整備・ウイルス進化に関する研究の推進・診断技術とワクチンへの投資 これらの対策は、リスクの低減、公衆衛生の保護、そして将来の人獣共通インフルエンザの脅威に対する乳業の持続可能性を確保するために重要である。